学べるゲラ

第46回
戦国軍記「武功夜話」

※2024年1月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

織田信長や豊臣秀吉ら戦国武将の若き日の姿を伝える戦国軍記「武功夜話」。戦国時代を解明する第一級史料との評価がある一方、記述の信頼性の疑義から「偽書」との指摘もつきまとう。そんないわくつき文書の真贋論争が一気に進展する可能性が出てきた。

武功夜話は愛知県江南市の旧家・吉田家に伝わる家伝文書群「前野家文書」の一つ。吉田家27代当主の弟、吉田蒼生雄さんによると、戦国時代に「前野」姓を名乗った土豪だったという前野家の系図や歌集、書簡など各種記録のうち、前野家が仕えた信長や秀吉に関する「桶狭間の戦い」「墨俣一夜城の築城」などさまざまなエピソードについて、吉田家16代当主の吉田孫四郎雄翟が江戸時代前期にまとめたのが武功夜話だ。

文書は1959年の伊勢湾台風で吉田家の土蔵の壁が崩れて、その存在が明らかになったとされる。蒼生雄さんが87年、原文を読みやすく翻訳した全5巻の全訳を刊行した。

信長の伝記「信長公記」ではスムーズに進んだされている安土城築城について「巨石が重くて動かせなかった」などと苦労した様子を伝え、秀吉の水攻めで落城した鳥取城に関し、信長公記では「1回」とされている城攻めの回数が「2回」だったと記述。一部の研究者からは「これまでの戦国史を覆す一級史料」などと評価され、秀吉に仕えた前野将衛右門を描い

た遠藤周作の「男の一生」など歴史小説の種本としても使用された。

一方、武功夜話を巡っては、明治時代に岐阜県富田村と加治田村が合併して誕生した「富加」の地名が出てきたり、幕末以降に広がったとされている「隊」という言葉を使った「鉄砲隊」といった用語が登場したりするなど、一部の研究者からは創作時期や記述の信頼性に疑義が出ていた。

真贋を見極める調査が必要として武功夜話を含む前野家文書全ての現物公開を求める声が外部から上がったが、「文書は先祖がたどってきたことを子孫に教えるもの。他人に見せてはならないと伝わってきた」（蒼生雄さん）として、「愛知県史」を編集した一部の研究者など限定的にしか公開されてこなかった。

ところが２０２３年、文書を長年保管してきた蒼生雄さんが、文書を全て寄贈することで江南市と合意した。蒼生雄さんは毎日新聞の取材に「（自身が）高齢となり、文書が散逸してしまうのを防ぎたい」と理由を説明。文書は段ボール約50箱分以上に上るといい「みなさんいろいろなことを言うが、全貌をきちっと見た方は誰もいません」と偽書説を否定していた。

蒼生雄さんは23年８月に86歳で急逝。蒼生雄さんの長男は同年末の取材に「江南市には文書を公開し、（真贋の）調査のため研究者への貸し出しもしてほしい。調査を進めて『偽書説』を払拭（ふっしょく）してもらいたい」と話した。江南市は今後、遺族と寄贈に向けて調整する予定だ。